

P-393 右肺管状肺全摘術を施した分岐部浸潤T4 肺癌の1例

¹自治医科大学, ²宇都宮社会保険病院呼吸器外科, ³国際医療福祉病院呼吸器外科

遠藤 俊輔¹, 齊藤 紀子¹, 長谷川 剛¹, 佐藤 幸夫¹,
金井 義彦¹, 山本 真一¹, 手塚 憲志¹, 塚田 博¹,
蘇原 泰則¹, 大谷 真一², 手塚 康裕³, 村山 史雄¹

術前化学療法後に右肺管状肺全摘術を施行した右上幹原発分岐部浸潤肺癌の症例をビデオで供覧するとともに当科での分岐部浸潤肺癌8症例の外科治療成績を呈示する。(症例) 57歳の男性で2001年12月血痰にて発症。右上幹原発低分化腺癌で分岐部浸潤及び右葉気管支間リンパ節に転移を認めc-T4N1M0と診断した。CDDP・TXTを用いた化学療法を1クール施行後第30日目に手術を施行した。(術式) 右第5肋間後側方開胸後, 右肺静脈・奇静脈を切離し, 右主肺動脈を露出。病巣が主肺動脈に及んでいたため心膜裏側で切離した。上縦隔及び分岐下左気管・気管支リンパ節を郭清しながら分岐部を露出した。病巣が気管最終軟骨輪まで及んでいたため気管側は2軟骨輪を左主幹は2軟骨輪切除した。術野挿管にて換気しながら, 軟骨部を12針全てかけた後テレスコープ型吻合を行い, 気管内挿管を進め最後に膜様部を閉鎖した。吻合線から気管側と左主幹側に1軟骨輪離して支持糸を2針づつかけ各々を結ぶことによって過緊張を防いだ。手術時間4時間35分出血量450mlであった。術後第25病日に退院した。病理検査の結果, 低分化腺癌p-T4N0M0であった。